

細胞診断に苦慮した DCIS の 5 例

川口市立医療センター検査科病理¹⁾,

医療生協さいたま生活協同組合埼玉協同病院病理科²⁾

○今村尚貴(CT)¹⁾, 鈴木忠男(CT)¹⁾, 松永英人(CT)¹⁾, 山岡美奈(CT)¹⁾,
須賀恵美子(CT)¹⁾, 山本雅博(MD)¹⁾, 坂田一美(MD)¹⁾, 石津英喜(MD)²⁾

【はじめに】近年画像診断技術の向上に伴い、微小石灰化や微小病変として非浸潤性乳管癌 (DCIS) が検出されるようになり、穿刺吸引細胞診や針生検等で遭遇することが増えている。DCIS の細胞像は異型が弱く診断に苦慮することがあり、当院でも浸潤癌に比べ「鑑別困難」と報告した割合が多い。今回我々は穿刺吸引細胞診にて「悪性」と診断し得なかった 5 例を中心に細胞所見を見直した。

【対象】1997 年 1 月から 2006 年 8 月までの 9 年 8 ヶ月間に当院で手術を行った 942 例の内、組織学的に DCIS と診断され、術前に穿刺吸引細胞診を行った症例 18 例中「鑑別困難」・「悪性の疑い」とした 5 例を中心に細胞所見を見直した。対象となった 18 例の内、断面にて腫瘤形成を確認できなかった症例は 10 例で、その内 7 例は「悪性」とし得なかった症例であった。また、腫瘍の広がり、は、「悪性」とし得なかった症例で 3-22 mm、「悪性」とした症例は 20-90 mm であった。

【結果】「鑑別困難」・「悪性の疑い」とした 5 例は 1)筋上皮細胞;(+)、2)核大小不同;(-)、3)核形不整;(-)、4)小型の核といった良性を思わせる所見と、5)核クロマチン増量、6)核緊満感;(+)、7)核密度高度上昇(隣り合う核の核縁が隣接)、8)N/C 上昇といった悪性を思わせる所見を併せ持っていた。